

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 井島正博

本論文は中古語のテンス・アスペクトについて、先行研究を着実にふまえ、その問題点を指摘しつつ新たな観点から総合的にあつかったものである。

本論文は四つの部分からなり、第一部で過去表現、第二部で完了表現、第三部では従属節の時制、第四部では過去・完了の助動詞の研究史に関して論じている。

第一部では、物語世界をそのソトにある表現者の視点から捉える「表現時」と、物語世界の出来事をそれに密着してウチの視点から捉える「物語時」という、二つの時間の関係づけとして時制理論は組み立てなければならないと主張する。そして中古語の過去表現においては、表現時はケリによって、物語時はキによって表わされると結論づける。その立場から中古仮名文学作品の類型化に及ぶとともに、断定の助動詞ナリとの承接順序から助動詞の意味的相違を問題にし、更には物語冒頭句「今は昔」と表現時・物語時との相関の問題や、丁寧語ハベリと係助詞ナムの使用と会話性との関係の問題を論じている。

第二部では、アスペクトとは、当該事態の外部から与えられた基準時において、当該事態が時間的展開のどの段階にあるかを表わす表現の仕組みであるという考え方をとる。そして、現代語のアスペクト・システムが「動作」にだけ適用されるものであるのに対して、中古語のシステムは、動作だけでなく、状態をも含んだ「事態」に対して適用されるものであるとする。それによるなら中古語のアスペクトは、完了のヌが事態の始発を表わし、その後の経過の段階をタリ・リが表わし、完了のツが事態の終結を表わすというシステムであり、現代語のシテイルのように動作の継続とともに、動作の外部に動作の終結後の持続というアスペクトを認める必要はないとする。同時に、完了の助動詞の確述とよばれる用法を基準時点を仮想的地点においた完了であるとするとともに、完了表現には段落構成的なテキスト的機能が存在することを論じる。

第三部では、中古語の複文での相対的テンスのありかたを、格助詞、および相対名詞の場合について論じ、ヨリとノチ、サキとマデのちがい、およびトキ節の従属度について実証的に研究している。

第四部は研究史資料集成という観もあるが、その整理の仕方によって、本論文の研究史に対する評価がおおずと知られる構成になっている。

本論文は、第一部のテンス論において、表現時と物語時に対する機能的側面から時制表現を組織化することに成功しており、今後の中古作品の時制研究のスタンダードとなるものと思われる。第二部は、説明が不十分なところもあるが、現代語と古代語のアスペクトシステムがおおきくことなる可能性を示した点で意味がある。第三部は、一部、二部と術語の面でのすりあわせが十分でないところも感じられるが、中古語の従属節が独立性が強いことを十分に示している。第四部の完了の助動詞の研究史は、なかにこれまでの研究で等閑に付されてきた諸説についても詳細な紹介があり、今後のこの方面の議論の基盤となるものであるといえる。以上より、本審査委員会は、全員一致で本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論に達した。